

【コメント】

金谷 美和 KANETANI Miwa

京都大学人文科学研究所

大滝氏の発表は、日本の伝統工芸、なかでも京都の西陣織の具体的な事例において、伝統工芸の衰退を市場性という観点から論じるというものであった。発表原稿で提示されていた論点は、伝統工芸を支えていたパトロン、使い手、顧客の消滅と、それらに代わって、安価や早さを求める市場経済の論理が優先したことが、伝統工芸の衰退につながっているとの分析である。そして、手仕事の価値や美しさを理解し、育て、それに対して適正な対価を払う消費者を育てることの重要性についての指摘があった。この指摘は大変に貴重なもので、私も賛同するものである。

伝統工芸であっても商品の一種であるので、市場経済から自由であるわけにはいかない。しかし、単に安さを求めるだけではなく、それに手仕事のよさや美といった価値に対して、お金を払う、という消費者は育ってきていると考える。この点は、フェアトレードという近年新しくおこっている理念に基づいた運動が参考になると考える。フェアトレードの考え方は、端的に言うと、第3世界の商品を適正な価格で購入することを目指すことである。従来、第3世界の商品を日本や欧米が輸入する際には、貨幣格差もあり、商品の質よりも安価であることが優先されてきた。そのためにより安価に商品を提供できることを競うために、生産者は搾取されがちであった。フェアトレードでは、商品購入に当たって、生産者に対して適正な対価が支払われているかどうかの評価されるのである。この考え方を通して、消費者は自分の消費という行為が、グローバリズムの中で、先進国と第3世界の関係や、生産者の労働条件など、他者に対して影響を与えていることを学び、消費者の行為が、世界構造を変革する可能性を持っていることを学ぶのである。消費者はまた、生産者の技術に対する敬意や、優れた技術によって生み出された手仕事に対して価値を認めることを学んでいく。価格よりも重要な価値を知るのである。

日本においても、フェアトレードのような理念に基づいた消費者を育てることが可能ではないかと思う。つまり、価格よりも、生産者やその技術に対する敬意、手仕事によって生み出されたものの美しさなどがより価値の高いものであることを商品選択の際の基準になるような経済理念である。ただ市場の原理に従っているだけでは、手仕事によって制作されたものは、価格競争に負けてしまう。

また、大滝氏の発表の中で、最も私にとって興味深かったのは、すぐれた技術をもった職人を評価するしくみとしての技術認定制度に対する批判である。日本には人間国宝という俗称と呼ばれる認定制度があり、優れた技術を持つ人を表彰するが、展覧会にあえて出品しない職人、企業や工場の中で仕事をする職人たちが、一般に認められる機会はない。展覧会に出品する人々のみが伝統工芸を担っているわけではなく、より多くの人々が支え

ているという指摘は、大滝氏が、文化庁において各地の多くの職人たちと接してきた経験から導かれている点で、耳を傾けるべき意見であると思う。

この大滝氏の批判に補足して、龍村氏による指摘もあった。伝統工芸には、多くの工程があり、それぞれに専業で携わっている職人がいる。またそれを統合するプロデューサー、あるいはアートディレクターが存在する。現在の表彰の仕方は近代的で、代表者のみが表彰される。むしろそれぞれの工程に携わる人の仕事や技術を評価するシステムに変えなければならないのではという指摘である。この指摘は、自身がアートディレクターとして伝統染織品の制作に携わっている龍村氏ならではのものである。